# お酒の神様　佐香神社　一畑口駅から徒歩10分

出雲地方では、毎年10月を「神在月」と呼び、全国の神様が出雲に集います。遥か昔、佐香川のほとりにある小さな池でスズメが稲穂を食べていました。その嘴（くちばし）からこぼれ落ちた稲穂のお米が池の水で発酵して濁酒（どぶろく）ができたそうです。その良い香りに誘われ集まって来られた神様が、スズメが楽しく歌うのを聞き、ふと興味を持たれその水をお飲みになったところ、あまりの美味しさに大変お気に召されました。その水が佐香川のほとりにあったことから、「佐香」と呼ぶようになり、いつしか「酒」と呼ばれるようになったそうです。

佐香神社

古くから酒造をしていた神社は全国で30数カ所あり、県内には出雲大社と佐香神社に酒造免許があります。佐香神社は毎年10月13日の秋の大祭にあわせ濁酒（どぶろく）を造り参拝者にふるまいます。佐香神社は別名「松尾神社」とも呼ばれ、主祭神は久斯之神（少名彦命）で、酒造りの神様として、また醤油、米酢、味噌などの醸造の神様として信仰をあつめています。この松尾様の名を頂く神社は、京都の松尾大社と佐香神社だけで、国から一年一石（180ℓ）の酒造免許（濁酒醸造認可）を受けています。

10月13日の例大祭は、670年続く由緒ある神事であり、県内外から出雲杜氏や各種醸造関係者が参拝に訪れます。濁酒が入った白木の樽が開かれ、その年の第1号となる新酒（濁酒）を神前に備えます。本殿横に設けられた祭壇で清めの儀式である「湯立て」の神事を行った後、宮司が注いだ神酒を廻し呑みし、参拝者全員が一年の酒造祈願と五穀豊穣・家内安全を祈願します。

この佐香神社が鎮座している小境は「出雲国風土記」の「佐香」が転訛して「古佐香井」「古酒井」「濃酒井」となったものと言われています。また、須佐之男命（すさのおのみこと）が八岐大蛇に飲ませた八塩折の酒も佐香神社でかもし出されたものだとされています。

佐香神社　御由緒

出雲国風土記に「佐香郷。郡家の正東四里一百六十歩なり。佐香の河内に百八十神等集い坐して、御厨立て給いて、酒を醸させ給いき。即ち百八十神喜讌して解散坐しき。故、佐香と云う。」とあります。

主祭神は「久斯之神（くすのかみ）」「大山咋命（おおやまくいのみこと）」 、配祀神は 「天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこほにに ぎのみこと）」 「木花咲耶姫之命（このはなさくやひめのみこと）」。

主祭神の「久斯之神」はいわゆる「薬師の神」であり、さらに出雲国風土記の古事にあるように「酒の神」でもあります。また、「醸す」とは、ただに酒を醸造することのみでなく、醤油・米酢・味噌等を醸造する事でもあります。一方、大山咋命は、世にいう「山を護る神様」で、森林業、鉱山業の守護神です。

そして、配祀神である 「天津彦彦火瓊瓊杵尊」、「海を護る神様」で、漁撈豊漁の神であるとともに、海上運航安全の神として広くあがめまつられています。「木花咲耶姫之命」は、縁結びの神であり、安産の神でもあります。

たくさんの酒樽が奉納されている。